

水俣学現地研究センターに関わって思うこと

田中 睦

水俣芦北公害研究サークル

水俣との出会いが私を変えた

1974年に大学を出て小学校教諭として赴任した水俣の地。たいした予備知識はなかった。ただ、教員だった父が渡してくれたのが「公害と教育－水俣病を中心とした現場実践のために－」（熊本県国民教育研究所・熊飽社会科サークル・熊本県教職員組合編、1972年）という赤表紙の冊子だった。水俣で教員をするならきっと役に立つはずとの親心だったのだろうと、後になって気づくことになる。

水俣病患者多発地区を校区に持つ袋小学校で教員生活が始まった。しかし、目の前に患者家庭の子どもたちがいるのに、水俣病のことを考えもしなかった。国語や算数をどう分かるように教えればいいのかと必死だった。それを変えてくれたのは患者さんだった。

当時の袋小学校には、前年の水俣病裁判（第1次訴訟）で患者支援をした市民会議のメンバーの先生たちがいて、患者さん宅によく連れて行ってもらった。次第に患者さんが気になる存在となっていく、ひとりで患者さん宅に行くようになった。

そんな教員2年目が終わろうとする冬、5年生の社会科で公害を扱うようになっていたこともあって、5年生の担任だった私が水俣病の公開授業をすることになった。私よりずっと患者さんともつながり、水俣病問題を深くとらえている先輩が何人もいた学校だが、私に勉強せよと課題を与える気持ちが強かったのだろう。

こうして水俣病と向き合わざるを得なくなった私は、主任制反対闘争を行っていた教職員組合に加入した。学校現場に「主任」という中間管理職を作ることは、協働しなければならない教員どうしを分断することになる。水俣病問題を学びつつある私は、水俣病によって人と人が分断されていったことを学んでいた。人はつながらなければならないという思いが水俣病によって育っていた私は、やっと組合加入を決意したのであった。

サークルで学ぶ

この年の夏、水俣芦北公害研究サークル（以下、サークル）が誕生した。サークル誕生のきっかけは、その前年（1975年）に行われた水俣高校定時制の弁論大会で優秀作品に選ばれた作品にある。「水俣病になりさえすれば、いくら働いても簡単に手に入らないようなお金が入るのだから、いっそのこと水俣病になって楽に暮らした方がいいのではないか」

熊本県教組は1973年に水俣病一斉授業を展開した。しかし前述の弁論作品が生まれていたのである。このことから、それまでの一斉授業を反省し、水俣病授業の見直しをしようということでサークルが始まった。

私自身1976年の公開授業（全7時間）の指導案では「公害を防ぐ」というテーマで、次のように述べている。「水俣病は公害の典型であり、被害の悲惨さだけでも他に類を見ないほどである。企業の無責任な排水たれ流しによって、地域住民の生命・健康が侵されている事実をつかみ、さらにそれを助長してきた行政側の責任についても着目させ、公害をなくすにはどうすればよいのかを考えさせていきたい」。さらに、公開する1時間の授業の目標は「チッソ（企業）の利潤追求の姿勢が水俣病（公害）を増大させていることを理解させる」というものだった。かなり元気のいい表現ではある。

その中で使った写真は、多くが劇症患者の様子を表したものだ。私は悲惨さを強調しようと、指の曲がった手足、よだれを流す患者…といった急性劇症患者の写真ばかりを見せていた。当時の私は、自分が水俣病に関わった時に受けた衝撃をそのまま子どもたちに伝えようとしていたのではなかったか、と今では思う。こんなひどい症状が水俣病で、そうでない人は水俣病ではないと受け止められるのではないかと、といった発想はなかった。私の授業も、先の高校生のような考えを生み出すことにつながったのではなかったか。こういう被害者像の提示の仕方が差別を生むかもしれないなどは考えもしなかった。その時はまだ水俣病差別について考えることはなかった。

1978年にサークル会員の授業実践をまとめた水俣病授業の実践報告書が完成した。さらに、現場からの「資料が欲しい」との声に応じて、1979年8月に水俣病教材資料集「水俣病・授業実践のために」を発刊した。その後5回の改訂を経て現在に至っている。

1995年の政治決着、2004年の関西訴訟最高裁判決とそれに伴う認定申請急増の動き、公式確認50年、60年、間もなく70年を迎えることなど、その時どきの大きな動きに呼応して改訂を重ねてきた。また、サークルでは学校関係者（学級・学年単位の児童生徒、教職員グループ、研究者など）を中心に水俣現地訪問者の案内も数多く行ってきた。

「水俣学」と出会って

このようなサークルの活動にとって大きな力となっているのが熊本学園大学水俣学現地研究センター（以下、現地センター）である。

1999年に熊本大学を退官された原田正純先生は「水俣学」を提唱して、同年熊本学園大学に赴任。2002年に水俣学講座が始まった。

2004年8月に学園大学の講座関係者とサークルの交流会が開かれた。この時私は水俣第一小学校に勤める現職教員で、公害サークルの会長でもあった。交流会で原田先生と話ができると思うとわくわくする自分がいた。その原田先生から、水俣学講座で話をするよう言われた。たいへん驚いた。大学で学生に向かって話をするなど考えたこともなかった。断ろうと

したが、憧れの原田先生からの誘いを断ったら一生見放されると思って引き受けることにした。何をしゃべったかは『水俣学講義（第3集）』（日本評論社、2007年）に掲載されている。

水俣学が始まり、2005年4月に大学内に水俣学研究センターが開設され、8月に水俣に現地研究センターが開かれた。これにより大学のみなさんと接する機会が増えた。公開講座やセミナー、水俣病事件研究交流集会などで学習することができるようになった。それ以上に楽しかったのが、会の後の反省会と称する飲み会だった。

水俣病を伝えるセミナーで

2010年夏から水俣学研究センターと公害サークル共同で開催する「水俣病を伝えるセミナー」が始まった。

1回目は対象を水俣・芦北の教職員として、現場の先生が参加しやすい夏休み中の8月3・10・24日に開催した。花田先生から基礎講座として話を聞いた。胎児性患者・上村智子さんの父親である上村好男さんの話も聞くことができた。

翌2011年の2回目も8月に開き、12日は原田先生においでいただき、100人を超える人が話を聞いた。25日には胎児性患者・坂本しのぶさんの母親坂本フジエさんから話していただいた。セミナーの後の交流会が賑わったことは言うまでもない。12日は原田先生ご夫妻も10時半頃までお付き合いいただいた。さらにそのあと患者さんも含めて日付が変わるまで飲んで、歌い、踊った。お互い若かったなあ…。



図1 2011年水俣病を伝えるセミナー

出典：筆者撮影

2012年に教職を退職した私は、4月から現地センターに勤めることになった。これからますます原田先生と話ができると喜んでいて、6月に原田先生がお亡くなりになった。現

地センターも火が消えたようだった。それでも8月8日、10日に3回目のセミナーを開いた。今回は参加者を教育現場で水俣病を伝える立場にある県下の先生に絞って行った。8日は、原田先生が話してこられた中から何を学び、水俣病をどう伝えていくかを考えた。10日は3人の患者さんの話を、それぞれの生活の場で聞くことにした。今回から水俣市教育委員会の後援を得ることができた。

2013年の第4回目は水俣芦北の先生を対象に、患者さんの話を聞きながら水俣芦北の海岸線を北上するフィールドワークを8月9日に行った。10日はフィールドワークの感想を出し合い、授業をどう実践していくかを話し合った。

このように伝えるセミナーは、水俣病第一次訴訟など初期から水俣病に関わり自ら道を切り開いてきた人たちから話を聞いたり、現場を歩いたりして学んだことや感じたことをどう伝えていくかを考える場として設定した。

これからのこと

水俣学生みの親の原田先生はじめ、セミナーなどで話をしていただいた患者さんの多くが他界しておられる。原田先生の話は多数の本として残されているが、亡くなった患者さんの声をまとめたものは少ない。聞いた人それぞれの記憶の中にある声をまとめ、残し、伝える営みが必要だろう。

現地を案内してそこで何があったのかを話すとき、海が埋め立てられていたり、仕切り網が取り除かれていたり、目に見える水俣病事件の痕跡が見えにくくなっていることを感じる。現地案内の際に写真などを準備しておくことも必要だろう。

幸い水俣には現地センターがある。水俣病関係の書籍や資料が多数そろえてある。新日本窒素労働組合旧蔵資料の中に膨大な数の写真があり、今も当時の組合員による整理が進められている。先に紹介したように、公開講座やセミナーも開かれる。スタッフのみなさんも多忙とは思いますが、人と人をつなぐ集まりを継続してほしい。その際、コロナで途切れてしまっている交流会を含めての企画をお願いしたい。もう日付が変わる時間まではもたないと思うけれども。